

日本学士院賞 受賞者 志茂碩敏



専攻学科目 東洋史学

生年 昭和一六年一月  
略歴 昭和四一年三月

同 四四年九月

同 四八年四月

同 五五年四月

同 五五年六月

同 五八年四月

同 六〇年四月

同 六〇年四月

平成 五年一月

東京大学文学部東洋史学科卒業

東京大学大学院人文科学研究所修士課程修了

(財) 東洋文庫奨励研究員 (昭和五五年五月まで)

立教大学文学部非常勤講師 (昭和五六年三月まで)

(財) 東洋文庫司書

(財) 東洋文庫付置ユネスコ東アジア文化研究センター研究員

国立国会図書館支部東洋文庫司書 (平成一四年三月まで)

(財) 東洋文庫研究員 (平成二五年四月より公益財団法人、現在に至る)

博士 (文学)

## 博士(文学) 志茂碩敏氏の「モンゴル帝国 史研究」に対する授賞審査要旨

志茂碩敏氏(以下、著者と称す)の本研究は、一三、一四世紀の間、中央ユーラシアの東西にわたって君臨し、さらにポスト・モンゴル期のユーラシア世界史にも深い影響を残した「モンゴル帝国」につき、ペルシア語の同時代史料を駆使して、政権の編成原理と構造を統括的、実証的に復原することに成功した画期的な労作である。著者の主業績のうち、『モンゴル帝国史研究序説…イル汗国の中核部族』(東京大学出版会、一九九五年二月、以下『序説』と称す)では、著者の独創的な考察の拠り所となった論点、すなわち同時代のモンゴル語用語からペルシア語用語への訳出をめぐる問題の考証が詳説されており、また近著『モンゴル帝国史研究 正篇…中央ユーラシア遊牧諸政権の国家構造』(東京大学出版会、二〇一三年六月、以下『正篇』と称す)は、ペルシア語根本史料の現存する古写本八種相互の校合、校勘に立脚しつつ、モンゴル帝国の凝集力と結合の原理についての究明に充てられている。以下に、『正篇』を軸に、『序説』をも参照して、本研究における学術的貢献の特色について述べる。

第一は、「モンゴル帝国期」に関する史料学上の貢献である。モンゴル人がモンゴル語で編んだ同時代史料が存在しない以上、根本史料としては東方の漢文史料及び西方のペルシア語史料が双璧をなす。しかし漢文史料の記述範囲は狭くまた限られている。一方、ペルシア語史料、なかんずく帝国後半期にその中興の英主、イル汗国の第七代、チンギスカンの後裔の王ガザン汗(在位一二九五―一三〇四)が敕撰した『モンゴル史』、これに収まる「部族誌」は、ガザン汗が宮廷内に保有し、モンゴル語で記述された諸部族の未整理の原資料類を、汗が自ら口述しつつ、宰相であり稀代の歴史家でもあったラシード・ウツダイーンに編纂を命じたものであり、また弟で第八代、オルジェイト汗(在位一三〇四―一六)が、ガザン汗の『モンゴル史』を再びラシードに勅命して整理を加えて成った『集史』(世界史)、及びその附篇『系譜集』(「モンゴル系譜」)も、ともに白眉に位する根本史料である。著者は、これらのペルシア語史料群が、この中興期にモンゴル諸族のアイデンティティを高揚させ結束を固める目的のもとで、モンゴル族の伝統を熟知する二人の汗が、モンゴル語の原資料に依拠しながらペルシア語で編纂させた経緯に注目し、至高の史料としてこれらを位置づけている(『序説』、『正篇』)。

第二の貢献は、上記の史料群の中で、ラシードがモンゴル語からペルシア語への訳出において頻用している、有力部将達の職掌と地

位、由緒を指す特別な用語につき、その内包と外延に対し、用例を逐一検証しながら解析し、その結果、政権の軍事力と凝集力を基礎づけている有力部将達の統属の原理は、チンギス汗時代と同様、イラン汗国時代にもそのまま継承されていたことを突き止めている。この洞察の要所を示せば以下のごとくである。ペルシア語で *amir-i-buzurg* ないし *amir-i-mu'tabar* と表記される用語がある。ペルシア語の *amir* は一般には「司令官、部将、王族など」を指す。一方、ペルシア語の形容詞 *buzurg* は「大きい、偉大な」に当たり、また *mu'tabar* は「信頼できる」を意味する。先学ドーソン (A. C. M. d'Ohsson) の『モンゴル帝国史』(一八五二) 以来最近までの研究では、この *amir-i-buzurg* ないし *amir-i-mu'tabar* は「大アミール (大部将)」を含意する用語とのみ考えられてきた。しかし、ラシードの訳出の用例を検証すれば、これらの用語は一貫して「チンギス汗一門の、親衛の部将」という特定された含意で使用され、しかも、これらの用語はラシードの編述時代に限って頻用されている。そこで著者は *amir-i-buzurg*、*amir-i-mu'tabar* を、「御家人、honorable house-men」(日本中世・近世の職からの類比) の用語によって説明する。この創見を用いれば、史料中に *amir-i-buzurg*、*amir-i-mu'tabar* と特称されている人物は、「大部将一般」というよりは、むしろチンギス汗の直系なしいし姻族、娘婿、養子などの由緒をもつ親衛の万人隊の長、千人隊

の長、百人隊の長、王陵の長、オルド(宮廷)の長など、父祖の由緒、功績によって職掌を安堵されている具体的な人物、すなわちモンゴル語で *nökör* と呼ばれ、ペルシア語で *nakar* と写された人々についての伝記的記述であるという実態が解けてくる(主に『序説』)。第三の貢献として、著者は『正篇』の大半を費やして、以上の根拠を手がかりとして、校定を施したペルシア語古写本史料を徹底的に参照しつつ、チンギス汗時代からガザン汗時代に至るまでに *amir-i-buzurg* (honorable house-men) として記録に留められた者達について、帝国の計四八部族・分族の個々にわたって、チンギス汗一門との血縁的、擬血縁的なつながり、職掌の内容と地位を詳細に考証・復原している。

以上の著者の研究は、(一)「モンゴル帝国史」の全体像を解く基礎史料として、ガザン汗口述救撰、ラシード編の『モンゴル史』、オルジェイト汗救撰、ラシード編の『集史』が史料学上至高の価値を有することを立証したこと、及び、(二)帝国期を通ずる汗(王)と部将との統属原理を立証して、先学がすでに考証してきた匈奴、突厥、回鶻らの遊牧部族連合国家の編成原理の伝承を究明したことに於いて、学界からも高い評価を得ている。本研究は、中央ユーラシア史研究の前進に寄与する画期的な労作であり、日本学士院賞の授与に値するものである。

## 主要な業績

### 著書

- 一、『モンゴル帝国国史研究序説…イル汗国の中核部族』東京大学出版会、平成七年二月、五三二頁
- 二、『モンゴル帝国国史研究 正篇…中央ユーラシア遊牧諸政権の国家構造』東京大学出版会、平成二五年六月、一一二八頁

### 編著

- 一、志茂碩敏編『中東における伝統と変革…その基礎的研究』（昭和五六年年度科学研究費総合研究A研究成果報告書）、昭和五七年三月、三三〇頁
- 二、志茂碩敏・八尾師誠共編『東洋文庫所蔵ペルシア語文献および関係書誌目録』東洋文庫、昭和五七年三月、四三四頁
- 三、志茂碩敏・八尾師誠・井谷鋼造・岩見宏・関喜房共編『日本国ペルシア語文献所在総目録 Ⅰ、〈目録篇〉』紀伊國屋書店、昭和五八年二月、七九二頁
- 四、志茂碩敏・八尾師誠・関喜房・井谷鋼造・岩見宏共編『日本国ペルシア語文献所在総目録 Ⅱ、〈索引篇〉』紀伊國屋書店、昭和六〇年三月、三四〇頁
- 五、志茂碩敏編『ペルシア語文化圏の成立と展開に関する総合的研究』（昭和六一年、六二年度科学研究費総合研究A研究成果報告書）、昭和六三年三月、五〇頁
- 六、志茂碩敏・岩見宏・関喜房共編『東洋文庫所蔵ペルシア語文献目録』東洋文庫、平成三年三月、五二〇頁
- 七、志茂碩敏編『ペルシア語古写本資料精査によるモンゴル帝国諸王家に関する総合的研究』（平成五〜七年科学研究費総合研究A研究成果報告書）、平成八年三月、九六頁
- 八、志茂碩敏編『ポストモンゴル期におけるアジア諸帝国に関する総合的研究』（平成一一〜一三年度科学研究費基盤研究B研究成果報告書）、平成一四年

### 論文

- 三月、一二〇頁
- 一、『II Khan 国史料に見られるQarannas について』『東洋学報』五四―一、昭和四六年六月、一―一七頁
  - 二、『II Khan 国史料に見られるQarannas について』（上記一、の改訂版）、流沙海西奨学会編『アジア文化史論叢』三、山川出版社、昭和五四年八月、一―六二頁
  - 三、『The Qarannas in the Historical Materials of the II Khanate』（上記一、の英訳版）。『Memoirs of the Research Department of the Toyo Bunko』三五、東洋文庫、昭和五二年三月、一三一―一五二頁
  - 四、『Ghazan Khan 政権の中核群について：II Khan 国における Ghazan Khan 政権成立の意義』『アジア・アフリカ言語文化研究』一八、昭和五四年二月、五六―一五〇頁
  - 五、『II Khan 国成立後の『Adherbaijan 軍政府』起源の軍隊について：Ghazan Khan の即位前後に見られる II Khan 国におけるモンゴル諸勢力の消長』『アジア・アフリカ言語文化研究』一九、昭和五五年八月、一五―四八頁
  - 六、『Ghazan Khan 没後の II Khan 国におけるモンゴル諸勢力の消長について：II Khan 国史上における Ghazan Khan 政権』『アジア・アフリカ言語文化研究』二一、昭和五六年三月、七四―一〇頁
  - 七、『イル汗国におけるフラグ家姻戚の有力諸部隊』『内陸アジア・西アジアの社会と文化』山川出版社、昭和五八年六月、六六七―六九五頁
  - 八、『イル汗国におけるモンゴル人』『東洋史研究』二―四、昭和五九年三月、一三〇―一六六頁
  - 九、『イル汗国におけるジャライル部族…イル汗諸政権の中核について』『櫻博士頌寿記念東洋史論叢』汲古書院、昭和六三年一月、二三三―二七六頁
  - 一〇、『イル汗国史研究…イル汗国諸政権の中核について』（東京大学文学部学

位請求論文)、平成五年一月

- 一一、『Tajik-i Ghazani』と『集史』「モンゴル史」(平成五～七年度科研費総合研究 A 研究成果報告書)、平成八年三月、一―一九頁
- 一二、「モンゴルとペルシア語史書…遊牧国家史研究の再検討」『岩波講座世界歴史巻一一、中央ユーラシアの統合』、平成九年二月、二四九―二七三頁
- 一三、「モンゴル帝国の支配と東西世界の交流」『アジアの歴史と文化』九、同朋社、平成二二年四月、一〇五―一一九頁
- 一四、「ガザン・カンが詳述するモンゴル帝国遊牧部族連合」『東洋史研究』六〇  
一、二、平成一三年九月、四〇五―四五六頁
- 一五、「Two Important Persian Sources of the Mongol Empire', in *Etudes Mongoles et Siberiennes*, Paris, 1997, pp. 221-224.

(その他史料紹介、学会発表は省略)